

## IV マーケットに対応した複合型 生産構造への転換



## 1 全国に名を馳せる園芸産地づくり

### 1 野菜

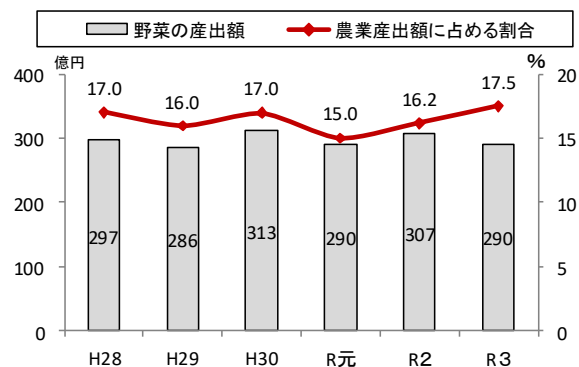
#### ◎令和3年の野菜産出額は290億円(いも類含む)

野菜産出額は、前年から17億円減少して290億円となり、前々年と同じとなった。

農業産出額全体に占める割合は17.5%と、前年より1.3ポイント、前々年より2.5ポイント増加し、野菜生産の重要性が更に高まっている。

令和3年は、6～8月に高温、干ばつとなったため、夏期の出荷量が減少した。秋期以降は、全国的な豊作傾向により単価安となったことが、産出額減少の要因として挙げられる。

＜図4-1＞野菜の産出額



資料:農林水産省「生産農業所得統計」

#### ◎令和3年の野菜重点6品目の作付面積は3,210ha

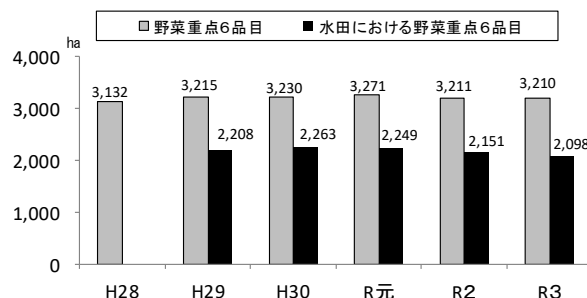
野菜重点6品目の作付面積は、前年より1ha減少して3,210haとなった。メガ団地等の整備によりねぎ・きゅうりは増加したものの、それ以外の品目は高齢化等により減少した。

また、野菜重点6品目の作付けにおける水田の割合は65.4%となっている。

注)野菜重点6品目:

えだまめ、ねぎ、アスパラガス、トマト、きゅうり、すいか

＜図4-2＞野菜重点6品目の作付面積



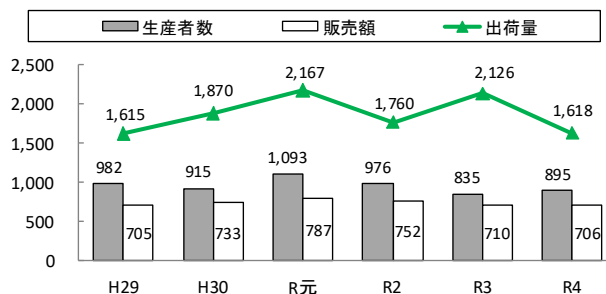
資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」  
県水田総合利用課、園芸振興課調べ

#### ◎ねぎ、せり、山うどを中心とした冬期野菜生産

令和4年度の冬期野菜の出荷量は1,618tで、前年度に比べ24%減少したものの、せりやほうれんそうの販売が好調であったため、販売額は706百万円と前年度並となった。

主な品目は、ねぎやせり等の葉茎菜類、促成アスパラガスや山うど等の伏せ込み栽培品目、山菜類であり、ねぎ・せり・ほうれんそう・山うど・ごみの上位5品目で、冬期野菜販売額全体の80%を占めている。

＜図4-3＞冬期野菜の生産状況 (単位:戸、t、百万円)



資料:県園芸振興課調べ

◎令和4年度系統販売額は94億円

令和4年度は、6月の低温、7月の干ばつ、8月の大雨等の影響を受け、出荷量は前年を下回った。ねぎ、すいか、トマトが高単価となったが、系統販売額は94億円と、前年を約1億円下回った。

このうち、オール秋田体制で推進しているえだまめ、ねぎ、アスパラガスは、系統販売額全体の44%を、きゅうり、トマト、すいかを含めた野菜重点6品目は80%を占め、野菜全体を牽引する品目となっている。

特に、ねぎは、メガ団地の整備や機械化一貫体系の普及等により、全県域で生産が拡大しており、令和4年度の系統販売額が27億円と、7年連続で20億円を超えている。

また、すいかは、面積が減少傾向にあるが、メガ団地における生産や単価高などにより、系統販売額は16億円（対前年比102%）と増加した。

令和4年度の販売額1億円産地は、延べ21産地となっており、えだまめ、ねぎ、アスパラガス、きゅうり、トマト等は県全域で、すいかやほうれんそうは県南部を中心に生産されている。

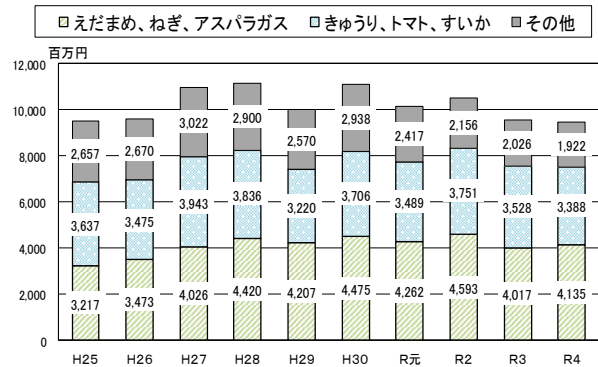
今後、更なる農業所得の増大を図るためには、単収と品質の向上が必要であることから、排水対策技術の普及や優良事例調査の実施、新技術の実証・普及定着を推進する。

〈表〉県内の1億円産地(R4年度)

品目	J A 名
ねぎ	あきた白神、秋田やまもと、こまち
えだまめ	あきた湖東、秋田おぼこ、秋田ふるさと、こまち
アスパラガス	秋田しんせい、秋田おぼこ
きゅうり	かづの、秋田ふるさと、こまち
トマト	かづの、秋田おぼこ、こまち
すいか	秋田ふるさと、こまち、うご
ほうれんそう	秋田ふるさと
せり	こまち
メロン	秋田なまはげ

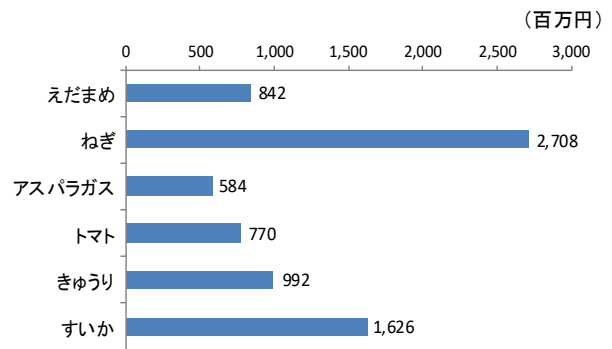
資料：全農あきた「R5年度JA青果物生産販売計画書」

〈図〉野菜の系統販売額



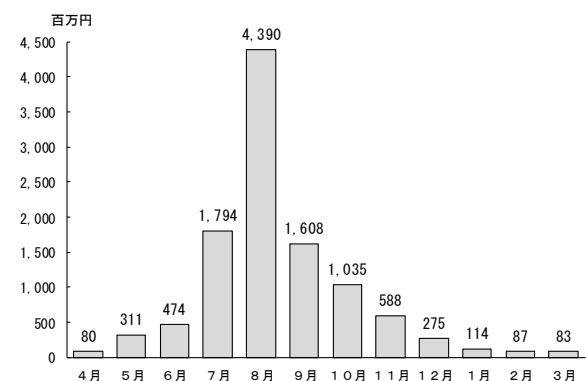
資料：全農あきた「R5年度JA青果物生産販売計画書」

〈図4-4〉R4年度野菜重点6品目の系統販売状況



資料：全農あきた「R5年度JA青果物生産販売計画書」

〈図〉令和4年度野菜の月別販売金額の推移



注)きのご類・加工品除き、いちご・メロン・すいか含む

資料：全農あきた調べ

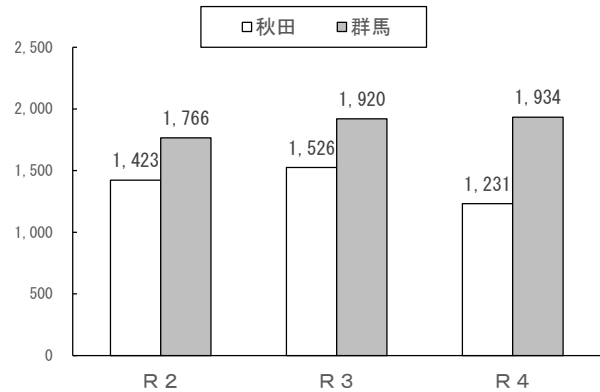
◎オール秋田で取り組む野菜産地の競争力強化

①えだまめの年間出荷量は全国第2位

京浜中央卸売市場への年間出荷量は、8月の大雨の影響により1,231tと前年より19%減少し、3年連続で群馬県に次ぐ全国第2位であった。

県産えだまめの認知度向上と新たな販路開拓を目的に、4事業者が取り組んでいる「えだまめゆうパック」販売では、首都圏におけるカタログ配布枚数を倍増させるなど、首都圏における取組が拡大した。

〈図〉京浜中央卸売市場におけるえだまめ年間出荷量



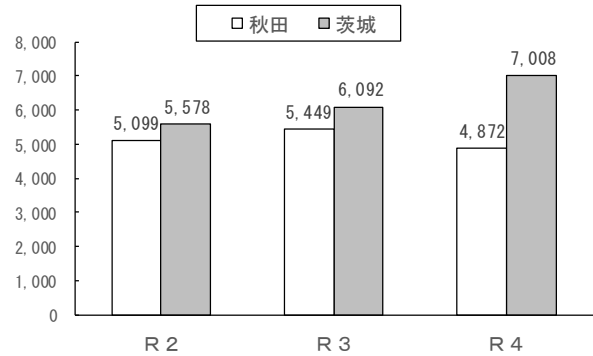
資料：県園芸振興課調べ

②夏秋ねぎの出荷量は全国第2位

全県域で生産拡大が進んでいるものの、8月の大雨の影響により、京浜中央卸売市場への夏秋ねぎ（7～12月）の出荷量は、4,872tと前年に比べて11%減少し、茨城県（7,008t）に次いで、4年連続で全国第2位となった。

また、更なる生産拡大を図るため、作期拡大を目的とした「小トンネル栽培」の実証を行ってデータを蓄積し、技術確立を図った。

〈図〉京浜中央卸売市場における夏秋ねぎ出荷量



資料：県園芸振興課調べ

③野菜における排水対策の推進

野菜等園芸品目では、排水不良による湿害の発生が収量性の低下につながることから、排水対策の技術普及を図るため、「排水条件改善モデル実証ほ」を全県8地域に設置した。

ねぎ、えだまめ、きゅうり、すいか、トマトなどのほ場において、サブソイラやパラソイラ、カットブレーカー等の排水対策機械を施工し、耕盤破碎や作土層拡大に取り組んだ。

その結果、67%（12か所中8か所）で単収が向上したほか、83%（12か所中10か所）で排水性が改善され作業性が向上した。

〈図〉排水条件改善モデル実証ほ（鹿角地域）



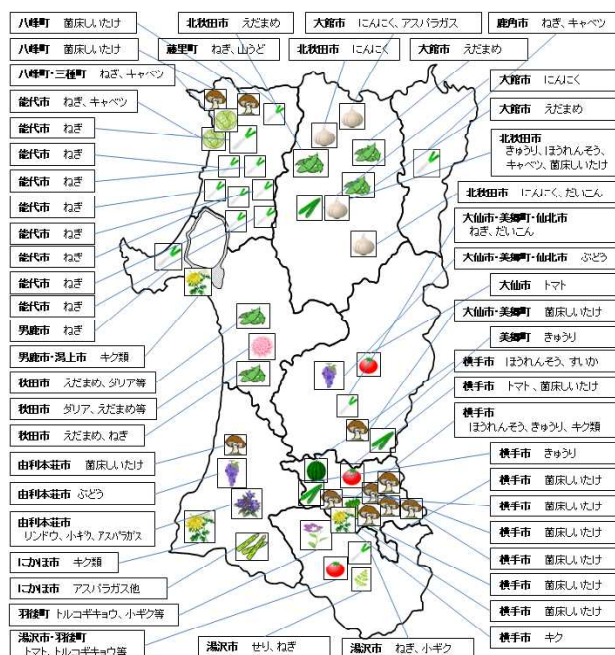
◎秋田の園芸振興をリードする「メガ団地」の全県展開

複合型生産構造への転換を加速させるため、販売額1億円以上を目指す「大規模拠点（メガ団地）」、中山間地域において販売額3千万円以上を目指す「中山間拠点」といった大規模園芸拠点の整備を推進した。

令和4年度は、大規模拠点1地区、中山間拠点1地区の計2地区で施設・機械等の整備を支援しており、令和3年度までに整備が完了したメガ団地等50地区と合わせ、園芸拠点は計52地区となった（しいたけ含む）。

また、参画した農家の経営が早期に軌道に乗るよう、JA・市町村・県が連携し、技術・経営の両面から濃密な支援を行った。

〈図〉秋田県の園芸メガ団地等の実施地区



◎大規模露地型野菜の生産振興

本県の広大な水田を活用した大規模露地型産地を育成するため、機械化一貫体系と輪作体系のモデル実証を行った。

令和4年度は、北秋田地域のにんにくとだいこんについて、定植から収穫までの機械化一貫体系と輪作体系の実証を行った。

〈図〉防除のドローン活用



〈図〉だいこん掘取機

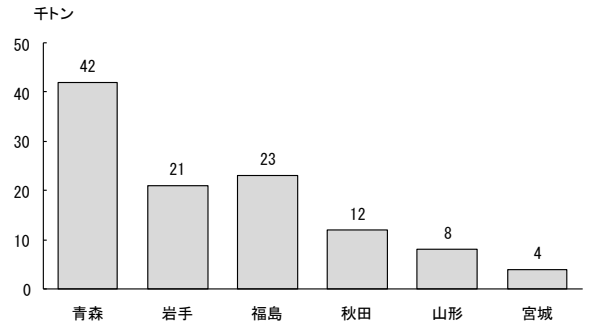


## 2 野菜の流通

### ◎東京都中央卸売市場での取扱量は全国24位

令和4年の東京都中央卸売市場での県産野菜の取扱量は11,769トンで、全国24位、東北では4位となっている。

＜図4-5＞東京都中央卸売市場の県産野菜取扱量（R4年）

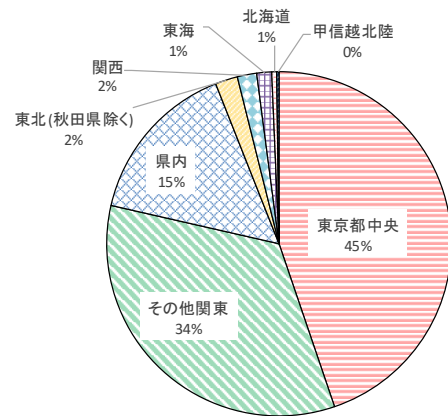


資料：令和4年東京都中央卸売市場年報

### ◎県産野菜は79%が関東、15%が県内向け

令和4年度における県産野菜の各市場への出荷割合は、東京都中央卸売市場が45%と最も高く、次いでその他関東市場が34%となっている。また、地域別では、関東地域が79%、県内が15%となっている。

＜図4-6＞県産野菜の出荷先（R4年度）



資料：全農あきた調べ

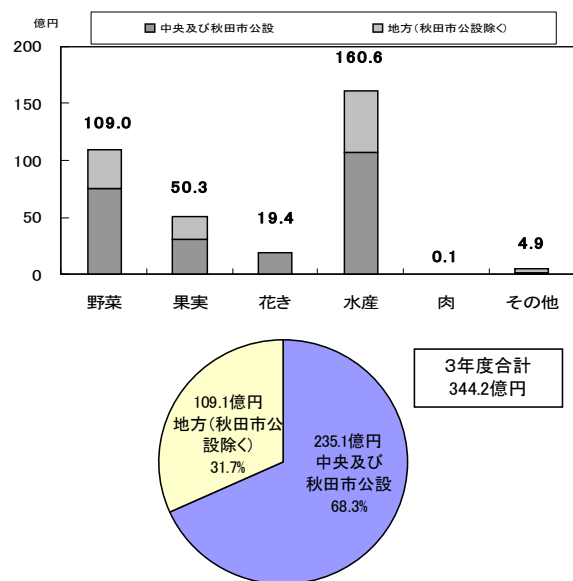
### ◎秋田市の卸売市場の取り扱いが県全体の約68%

本県の卸売市場数は、令和5年3月末時点で中央卸売市場が1（秋田市花き部）、地方卸売市場が8の合計9市場である。

9市場における取扱状況は、令和3年度には野菜が109.0億円、果実が50.3億円、花きが19.4億円、水産物が160.6億円で、合計344.2億円となっている。

そのうち68.3%が秋田市中央卸売市場及び秋田市公設地方卸売市場の取り扱いとなっている。

＜図4-7＞市場別取扱状況（R3年度）



資料：県農業経済課調べ

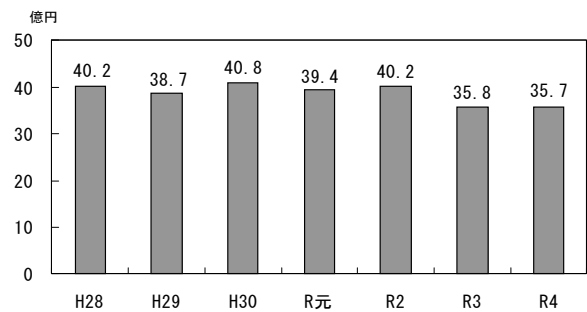
◎県内市場における県産野菜の取扱金額

主要2市場における令和4年の野菜の取扱金額は135.3億円で、そのうち県産野菜の取扱金額は35.7億円（26%）となっている。

秋田市公設地方卸売市場では112.1億円のうち27.5億円（24%）、能代青果地方卸売市場では23.2億円のうち8.2億円（35%）だった。

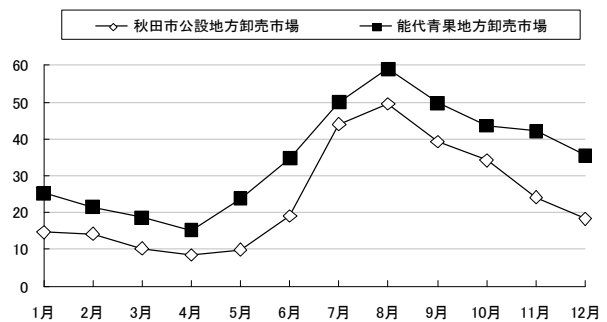
野菜産地を抱える能代青果地方卸売市場において県産野菜の取扱割合が高くなっているほか、県内産地の出荷時期となる7～11月にかけて、取扱割合が大きくなっている。

＜図4-8＞主要2市場における県産野菜の取扱金額



資料:秋田市場年報、能代青果月報

＜図4-9＞主要2市場の月別県産野菜取扱割合(R4)



資料:秋田市場年報、能代青果月報



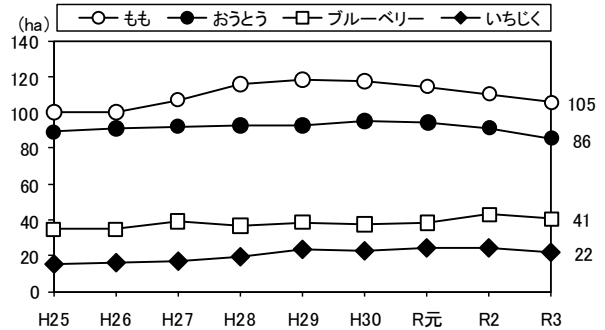
### 3 果 樹

#### ◎高収益性果樹、軽労果樹の導入が進む

本県果樹の主力は、りんご、なし、ぶどうであるが、近年、果樹経営の安定化を目指して、りんごに、ももやおうとうを組み合わせる樹種複合が増加している。

ももは鹿角市や横手市で、おうとうは湯沢市で産地化が進んでいるほか、軽労果樹であるブルーベリー、いちじくの栽培面積が平成25年度と比べて増加している。

＜図4-10＞果樹品目別の栽培面積の推移



資料：県園芸振興課調べ

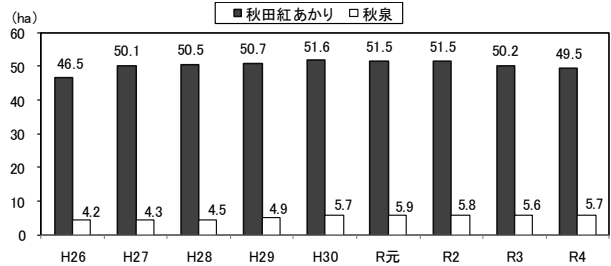
#### ◎秋田県育成オリジナル品種等優良品種の導入

りんごでは、主力品種である「ふじ」への偏重を是正し、所得向上を図るため、県オリジナル品種の生産拡大を促進している。特に、「秋田紅あかり」は消費者の評価が高く、「ふじ」よりも高単価で市場取引されている。

日本なしは、「幸水」が主力であるが、食味が良く市場単価も高い県オリジナル品種「秋泉」の生産拡大を図っている。

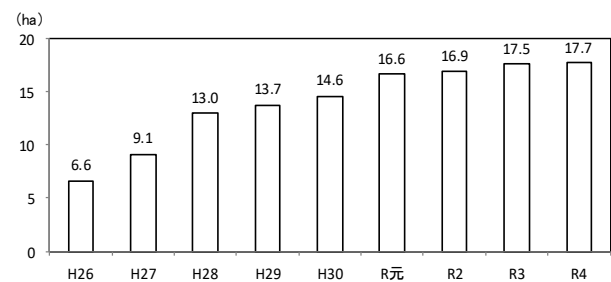
ぶどうは、「キャンベル・アーリー」など中粒種の面積が減少しており、無核（種なし）栽培が可能で消費者ニーズの高い「シャインマスカット」等の大粒種が増加している。

＜図4-11＞県オリジナル品種の栽培面積の推移



資料：県園芸振興課調べ

＜図4-12＞シャインマスカットの栽培面積の推移



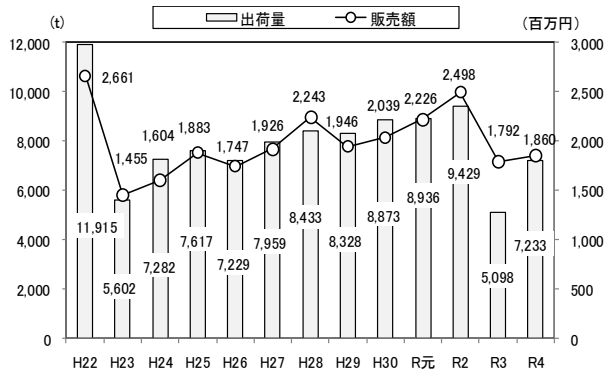
資料：県園芸振興課調べ

#### ◎大雪被害からの復旧

平成22年からの連続した大雪により、県南部の果樹を中心に甚大な被害が発生したが、改植などの復旧対策により、令和2年には主要樹種の出荷量が約8割まで回復した（平成22年対比）。

しかし、令和2年度の大雪により、再び甚大な被害が発生したことから、耐雪型樹形や樹体支持施設、スマート農機の導入・普及等により、除雪が容易で雪に強く、生産性の高い園地への転換を早急に進めている。

＜図4-13＞主要果樹の出荷量、販売額の推移



資料：全農あきた調べ

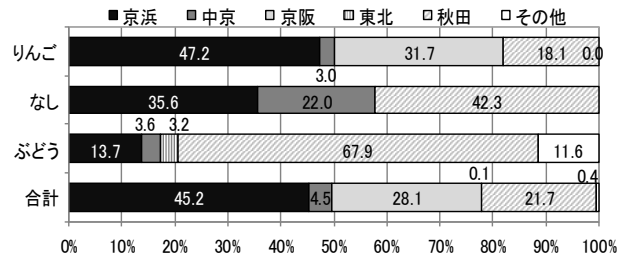
## 4 果実の流通

### ◎県産果実は45%が関東、22%が県内向け

令和4年産の県産果実の主要市場への出荷割合は、関東(京浜)地域45.2%、京阪神地域28.1%、県内21.7%となっている。

令和4年産の収穫量のうち市場出荷に向けられた割合(推定)は、りんご25%、日本なし41%、ぶどう17%となった。

〈図4-14〉県産果実の出荷先別割合(R4、重量ベース)



資料：全農あきた調べ

## 5 花き

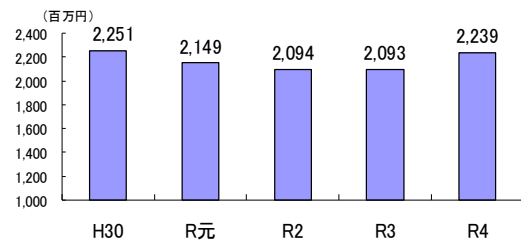
### ◎水田転作地を利用したリンドウの産地化が進展

令和4年度の花き系統販売額は約22億円となり、前年度比107%となっている。販売額に占める品目別の割合は主要5品目であるキク類36%、リンドウ23%、トルコギキョウ14%、ダリア5%、ユリ類4%で8割以上を占めている。

水田転作に適した品目として導入が進められているリンドウは、平成30年以降販売金額が伸び悩んでいたが、令和4年は505百万円まで回復した。

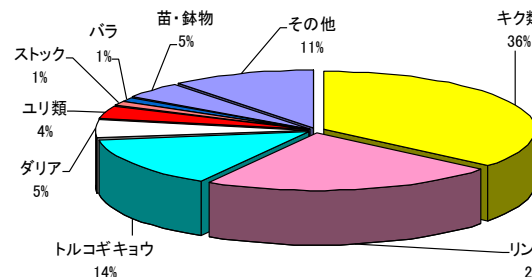
ダリアについては、県オリジナル品種「NAMAHAGEダリア」の人気の高まるなど、ブランドとして定着してきており、ダリア栽培技術アドバイザーを中心に、生産量日本一を目指した技術の高位平準化や他県産地とのリレー出荷などに取り組んでおり、令和4年度の販売金額は過去最高額の118百万円となっている。

〈図4-15〉花き系統販売額の推移



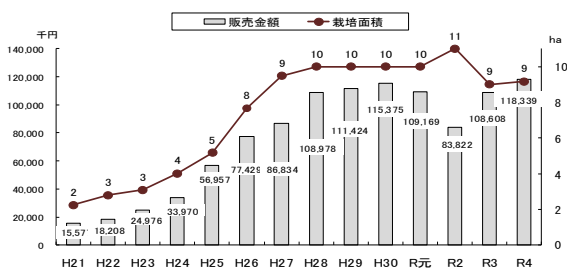
資料：全農あきた調べ

〈図4-16〉花き品目別系統販売額の割合(R4)



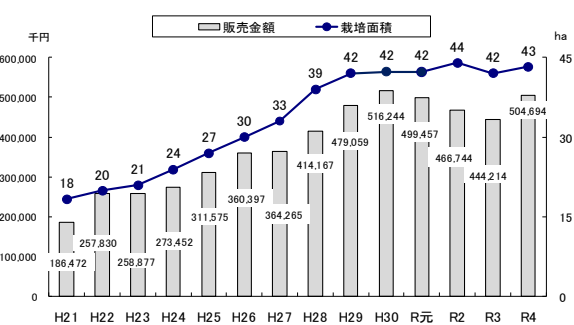
資料：全農あきた調べ

〈図4-18〉ダリア系統販売額及び栽培面積の推移



資料：全農あきた調べ

〈図4-17〉リンドウ系統販売額及び栽培面積の推移



資料：全農あきた調べ

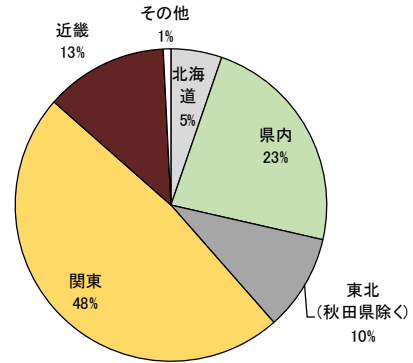
## 6 花きの流通

### ◎県産花きは48%が関東、23%が県内向け

令和3年産の県産花きの出荷量は51,500千本で、その出荷割合は、関東地域48%、県内23%、東北地域（秋田県を除く）10%となっている。

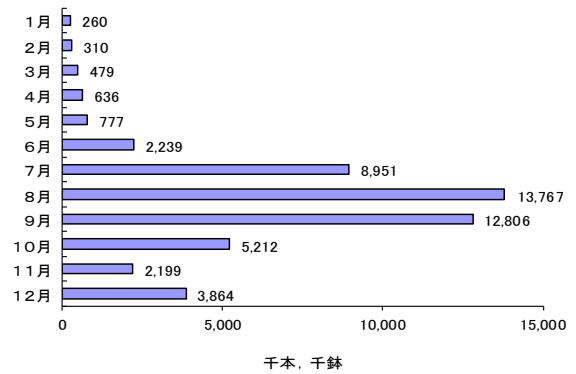
また、月別出荷数量は、8月が13,767千本で最も多く、次いで9月が12,806千本、7月が8,951千本となっており、この3か月で年間の約7割を出荷している。

〈図4-19〉県産花きの出荷先(R3)



資料：県園芸振興課調べ

〈図4-20〉花きの月別出荷量(R3)



資料：県園芸振興課調べ

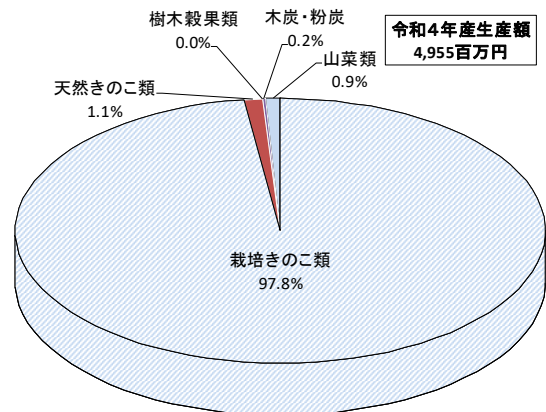
## 7 特用林産物

### ◎特用林産をリードするきのこ生産

令和4年産の特用林産物全体の生産額は約50億円で、前年より2.1億円（4.5%）の増となった。このうち、栽培きのこ類8品目で生産額全体の97.8%を占めている。

生しいたけについては、消費者の国産志向の高まりにより、製品の消費量が増加していることに加え、栽培方法が原木から菌床へ移行して、品質が向上したことから、低下傾向にあった単価は、近年、回復しつつある。

〈図4-21〉特用林産物生産額と品目別割合(R4)



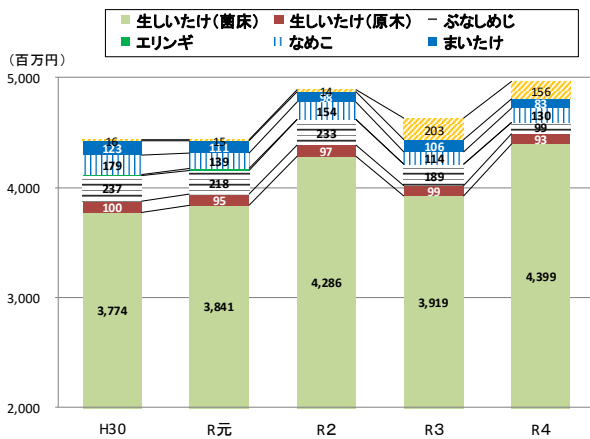
資料：県園芸振興課調べ

県産生しいたけの品質は市場評価が高く、メガ団地の整備等により出荷量が増加したことから、京浜中央卸売市場における出荷量、販売額、販売単価の販売三冠王を4年連続で獲得した。

生しいたけについては、冬期間だけでなく夏場にも生産するための技術が確立されており、周年出荷が行われている。

今後も、生産施設の整備が見込まれるほか、新たな地域での導入も検討されていることから、一層の産地拡大が期待されている。

＜図4-22＞栽培きのこ主要品目の生産額



資料：県園芸振興課調べ

＜表＞しいたけの年間出荷量(京浜中央卸売市場：上位3県)

(単位：t)

	R元	R2	R3	R4
秋田県	2,241(1)	2,315(1)	2,361(1)	2,502(1)
岩手県	2,105(2)	1,747(2)	1,631(2)	1,455(2)
栃木県	1,169(3)	1,073(4)	952(4)	677(3)

＜表＞しいたけの年間販売額(京浜中央卸売市場：上位3県)

(単位：百万円)

	R元	R2	R3	R4
秋田県	2,637(1)	2,771(1)	2,709(1)	3,021(1)
岩手県	1,809(2)	1,603(2)	1,405(2)	1,338(2)
栃木県	1,040(3)	983(4)	844(4)	709(3)

＜表＞しいたけの販売単価(京浜中央卸売市場：上位3県)

(単位：円/kg)

	R元	R2	R3	R4
秋田県	1,177(1)	1,197(1)	1,147(1)	1,208(1)
岩手県	860(3)	918(2)	861(3)	919(3)
栃木県	890(2)	916(3)	887(2)	1,047(2)

注) ( )内は順位

資料：県園芸振興課調べ

## 8 価格安定対策

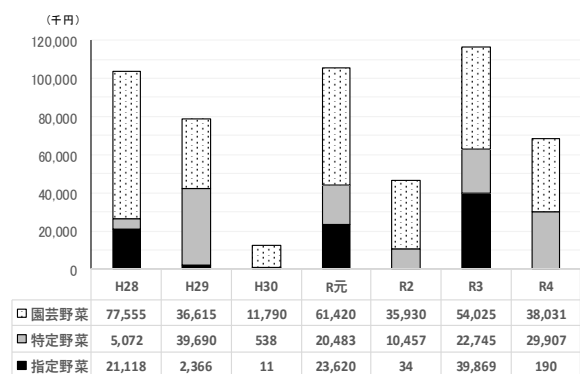
### ◎令和4年度補給金の交付額は前年度より減少

青果物等価格安定制度は、青果物等の価格が一定水準を下回った場合、生産者に対し補給金を交付するものである。

令和4年度の補給金交付額は68,128千円で、前年比58%となり、減少した。

4年度は、8月の曇天、大雨の影響による数量の減少から、きゅうり、トマトについては高値傾向で推移したが、えだまめについては、春先の低温で生育が遅れた関東産地と競合し、終盤まで価格の低迷が続いた。

＜図4-23＞青果物価格安定事業補給金の交付実績



資料：県農業経済課調べ

## 2 収益性の高い畜産経営体の育成

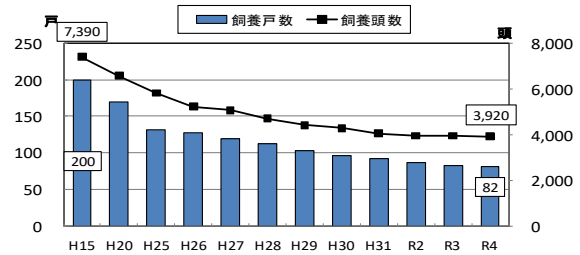
### 1 家畜

#### ◎乳用牛は飼養戸数及び頭数ともに維持

乳用牛の飼養戸数及び頭数は横ばいで推移しており、令和4年の乳用牛の飼養戸数は前年比99%の82戸、飼養頭数は前年比99%の3,920頭となっている。

一戸当たり飼養頭数は、前年の47.7頭から令和4年は47.8頭となった。

＜図4-24＞乳用牛の飼養状況



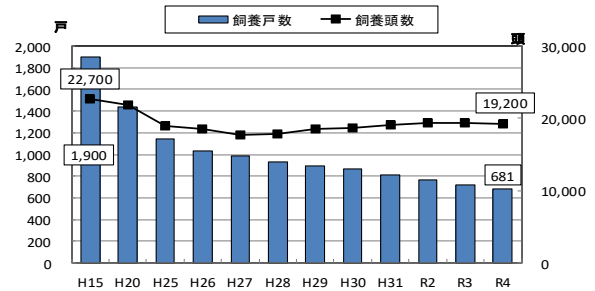
資料:農林水産省「畜産統計」

#### ◎肉用牛の飼養戸数は減少、飼養頭数は維持

飼養農家の高齢化や後継者不足による小規模農家の離農等により、令和4年の肉用牛の飼養戸数は前年比95%の681戸と減少した。

飼養頭数は前年比99%の19,200頭と横ばいで、一戸当たり飼養頭数は、前年の26.9頭から令和4年は28.2頭まで増加した。

＜図4-25＞肉用牛の飼養状況

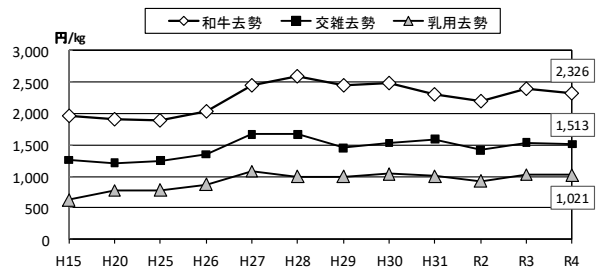


資料:農林水産省「畜産統計」

#### ◎牛枝肉価格は横ばいで推移

和牛の価格は、コロナ禍の影響によるインバウンドや外食需要の減退により一時下落したが、経済活動の再開や輸出の拡大に伴い回復し、令和4年度の東京卸売市場価格は、和牛去勢A4等級で2,326円/kgとなった。

＜図4-26＞牛枝肉価格の動向(東京卸売市場)



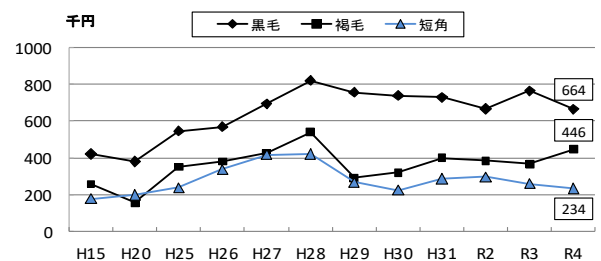
注) 和牛去勢(A-4)、交雑種去勢(B-3)、乳用種去勢(B-2)

資料:農林水産省「食肉流通統計」

#### ◎黒毛和種子牛価格は低下

枝肉価格の回復に伴い、肉用子牛価格も回復傾向であったが、飼料価格等の高騰による肥育農家の購入意欲低下等により、令和4年の子牛価格は黒毛和種で前年比87%の664千円となった。

＜図4-27＞県内子牛の価格動向

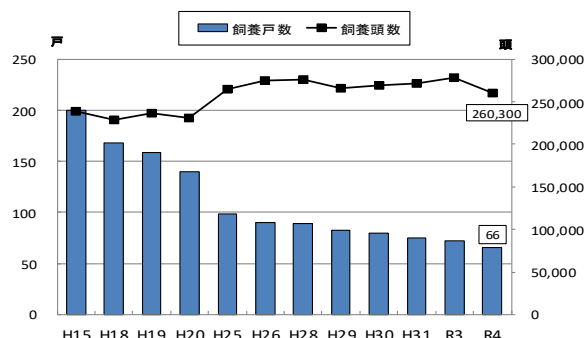


資料:全国の肉用子牛取引情報

◎養豚は飼養戸数及び頭数が減少するも規模拡大が進展

豚の飼養戸数は減少傾向で推移しているものの、大規模化や法人化が進んでおり、令和4年の飼養戸数は、前年比92%の66戸、飼養頭数は、前年比93%の260,300頭と減少し、一戸当たり飼養頭数は、前年の3,868頭から令和4年は3,944頭まで増加した。

＜図4-28＞豚の飼養状況



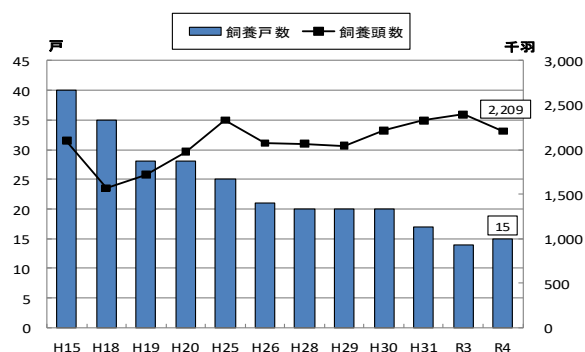
注) H27、R2年は農業センサス実施年のため調査未実施

資料:農林水産省「畜産統計」

◎採卵鶏は飼養戸数は増加、飼養羽数は減少

採卵鶏の飼養戸数は、令和4年で15戸と増加し、飼養羽数は、令和3年に本県で発生した高病原性鳥インフルエンザの影響により、前年比92%の2,209千羽と減少した。

＜図4-29＞採卵鶏の飼養状況



注) H27、R2年は農業センサス実施年のため調査未実施

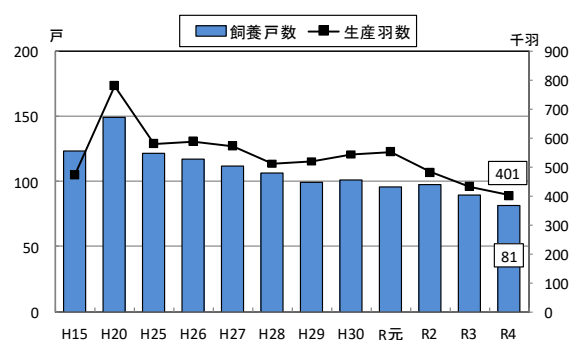
資料:農林水産省「畜産統計」

◎比内地鶏は生産羽数、飼養戸数ともに減少

比内地鶏は、本県を代表する特産品であり、地域の食文化に欠かせない食材であるが、コロナ禍の影響により外食向けを中心に需要が大きく落ち込んだことから、令和2年から3年間生産調整が行われた結果、生産羽数は前年比93%の401千羽に減少した。

飼養戸数は、平成20年の149戸をピークに減少傾向で、令和4年は前年比91%の81戸となった。

＜図4-30＞比内地鶏の飼養状況、生産羽数



資料:県畜産振興課調べ

◎大規模畜産団地等の整備による生産基盤の強化

本県畜産の生産基盤強化と畜産を核とした地域活性化を図るため、収益性の高い大規模畜産団地の全県展開を推進しており、令和4年度末までに54団地が整備された。

令和4年度は、畜産公共事業や県単補助事業を活用し、肉用牛繁殖経営の2団地が整備された。

〈表〉経営区分別の大規模畜産団地数

経営区分		団地数	規模
肉用牛	繁殖	15	繁殖牛概ね100頭以上
	肥育	6	肥育牛概ね500頭以上
	一貫	9	上記いずれかの頭数以上
酪農		8	経産牛概ね100頭以上
養豚		13	母猪概ね1,000頭以上
採卵鶏		3	採卵鶏概ね30万羽以上
合計		54	—

資料：県畜産振興課調べ

◎畜産経営の生産性向上や効率化の促進

肉用牛では、若い担い手の飼養管理技術等の向上や、家畜市場に上場される子牛の発育等のばらつきの解消に向け、研修会の開催や関係機関による重点的な巡回指導等を実施した。

酪農では、改良や飼養管理の改善に有効な牛群検定を促進し、比内地鶏では、実証ほを設置して夏場の増体低下の抑制等に関する検証を行った。

また、飼料等の価格高騰の影響を受けている畜産経営体に対して、再生産に向けた素畜導入や高品質生産の取組を支援するとともに、燃油や電気料金の価格高騰の影響を受けている食肉・食鳥処理事業者に対して、省エネ化・効率化に向けた設備整備を支援した。

〈図〉若手生産者を対象にした肉用牛の研修会



◎秋田牛・比内地鶏のブランド力の強化

秋田牛では、認知度向上に向けた首都圏のホテル等でのフェアの開催や、「秋田牛取扱店登録制度」（令和4年度末時点登録店舗363店）の運用による消費意欲の喚起などに取り組んでおり、令和4年度に出荷された頭数は2,972頭となった。

比内地鶏では、「秋田県比内地鶏ブランド認証制度」の適切な運用に努めるとともに、県内外における販促イベントの開催や県内販売事業者の販売促進活動の支援等に取り組んでおり、令和4年に出荷・販売された羽数は42万3千羽となった。

〈図〉「秋田牛取扱店登録制度」の登録証



## 2 畜産物の流通

### ◎肉用牛

肉用牛の出荷頭数は、令和3年には5,669頭で、うち2,253頭（40%）が県外に出荷されており、県内のと畜頭数は、県外からの284頭を含め3,700頭となっている。

### ◎肉 豚

県内のと畜頭数は、令和3年には前年比100%の305,572頭となった。

### ◎鶏 卵

鶏卵の出荷量は、令和3年に本県で発生した高病原性鳥インフルエンザの影響により、令和4年は前年比95%の40,392トンとなっている。

### ◎比内地鶏

比内地鶏の出荷羽数は、令和4年には423千羽で、うち236千羽（56%）が関東圏を中心とした県外に出荷された。昨年より県外移出量は減少し、県内消費量は増加した。

### ◎生乳・飲用牛乳

生乳の生産量は、令和4年には22,744トンで、うち15,933トン（70%）が県外へ出荷されており、県内処理量は6,811トンとなっている。

＜表＞肉用牛、肉豚、鶏卵及び比内地鶏の流通量

項 目	単 位	肉用牛		単 位	肉 豚	
		R2	R3		R2	R3
出 荷 量	頭	5,781	5,669	頭	-	-
県外移出量	〃	2,208	2,253	〃	-	-
県内移入量	〃	389	284	〃	-	-
県内と畜頭数	〃	3,962	3,700	〃	304,938	305,572
項 目	単 位	鶏 卵		単 位	比内地鶏	
		R3	R4		R3	R4
出 荷 量	t	42,697	40,392	千羽	426	423
県外移出量	〃	-	-	〃	242	236
県内移入量	〃	-	-	〃	-	-
県内消費量	〃	-	-	〃	184	187

注) 肉豚の出荷量等は平成22年度以降調査廃止

鶏卵の県外移出量等は平成27年度以降調査廃止

資料: 農林水産省「畜産物流通統計」

＜表＞生乳の流通量

項 目	単 位	生 乳	
		R3	R4
生 産 量	t	23,106	22,744
県外移出量	〃	15,962	15,933
県内移入量	〃	0	0
県内処理量	〃	7,144	6,811

資料: 農林水産省「牛乳乳製品統計」